

フィリピン・ムスリム研究

川 島 緑*

The Philippine Muslim Studies

KAWASHIMA Midori*

The purpose of this paper is to selectively review the existing studies of Muslims in the Philippines. Most of these studies were motivated by a concern to understand this religious minority group, which had been left out of the mainstream of Philippine history and culture, and to integrate them into the Philippine nation.

In the 1950s and 1960s, studies based on the modernization theory were prevalent, whereas since the 1970s, a number of studies have been published which attempt to analyze and explain the Muslim secessionist movement led by the MNLF. Here I shall focus on two approaches adopted in studies of this subject, one which explains the Mindanao conflict mainly by socio-economic factors, and the other which emphasizes the role of Islam in forming the Moro identity, as opposed to the Filipino national identity. Discussing some of the major works representing both approaches together with their contributions and shortcomings, I conclude that we need to investigate the socio-economic conditions of Mindanao, to examine how Mindanao people perceive these conditions, and to consider how, and to what extent, Islam influences the formation of such perceptions.

フィリピン・ムスリム¹⁾に関する研究は、武力紛争や国民統合、南部フィリピン開発に関する国家の要請や社会の関心と密接な関連をもって発達してきた。特に1970年代、モロ民族解放戦線(MNLF)を中心とする分離独立武装闘争が国際的に注目されて以来、フィリピン・ムスリムに関する関心がフィリピン内外で高まり、多数の評論や研究が発表されてきた。しかし、その研究動向には、著しい偏りがみられる。これまでの研究は、フィリピン・ムスリムを構成する各民族集団の民族誌や人類学的研究、分離独立運動に関する研究、地方史の分野に集中している。本稿では、米国統治期以降のフィリピン・ムスリムに関する研究を対象として、先行

* 上智大学アジア文化研究所; Institute of Asian Cultures, Sophia University, 7-1 Kioicho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8554, Japan

1) 本稿では、「フィリピン・ムスリム」という用語を、フィリピン国家の領域内に代々居住するムスリムを中心とする、フィリピン国籍を有するムスリムの総称として用いる。

研究の動向と特徴を論じた後、特に近年の研究が集中しており、筆者の主要な関心でもあるフィリピン・ムスリムの分離独立運動の研究について主要な研究を取りあげて、それらの評価を行い、最後に、今後の課題と展望を論じることにする。

なお、本稿では、フィリピン・ムスリムに関する全ての分野の研究を紹介したり、網羅的な文献目録を付すことはできなかったもので、それらについての手がかりを提供する文献として、以下の3点を簡単に紹介しておく。早瀬 [1986] はムスリム、他の少数民族、キリスト教徒入植者など、多様な住民で構成される南部フィリピンを全体的にとらえるべきだとして、「ミンダナオ研究」という視点から、南部フィリピンに関する史料や、1980年代半ばまでの主要な資料や研究を紹介、解説している。Horvatic [1993] は、第二次世界大戦以降、英語で刊行された東南アジアのイスラームに関する文献の目録である。国別ではなく、テーマ別構成になっているので、近隣国のムスリムについての関連文献を知ろうとする際、有益である。Mastura [1994] は、西洋的教育を受け、フィリピン政府のムスリム行政にも携わったフィリピン・ムスリム知識人としての立場から、これまでフィリピン・ムスリム研究に用いられたアプローチを批判的に検討し、ムスリム社会の発展のためには、西洋起源の世俗的な社会科学の知識を、イスラームの枠組みに沿うように改鑄する必要があることを論じている。

I 研究の展開

フィリピンでは、16世紀後半以降、スペインがルソン島とビサヤ諸島の大半を植民地化し、カトリックの教えを広めたが、南部のミンダナオ島、スールー諸島のムスリム支配者は、南部への進出を試みるスペイン人に対して外交や武力によって対抗し、19世紀後半に至るまでスペインによる実効的支配を免れてきた。スペイン人は、これらの地域に住む、程度の差はあれ、イスラーム化した人々を「モロ」と呼び、植民地支配とカトリックを受け入れた中北部の住民「インディオ」と区別していた。

20世紀の初めにフィリピン統治を開始した米国植民地政府は、「モロ」という呼称を引き続き用いた。米国統治期のフィリピン・ムスリム研究は、植民地政府の要請にもとづく調査とその報告により開始された。米国植民地政府は、「モロ」、および、全国各地の山地諸民族を、本国の先住アメリカ人（「アメリカ・インディアン」）と同様、後進的な未開民族とみなし、「非キリスト教徒部族（Non-Christian Tribes）」と名付け、これらの人々の統治を担当する機関として「非キリスト教徒部族局（Bureau of Non-Christian Tribes）」を設置し、文明化政策を実施した。米国植民地政府にとって、「モロ問題」とは、第一義的に南部の治安問題であり、彼らのイスラームに対する関心は、この問題に関係する場合に限られていた。

米国統治初期の代表的な研究として、ナジブ・サリービー（Najeeb Saleeby）による研究が

挙げられる。サリービーはシリア生まれのキリスト教徒で、米西戦争の際、米国陸軍の軍医としてフィリピンに赴任した。シリアで日常的にムスリムに接してきたサリービーは、その経験とアラビア語能力を買われ、ミンダナオ島に派遣され、そこで現地のムスリム有力者と親交を結んだ。彼は除隊後、非キリスト教徒部族局のモロ問題担当官やモロ州教育長を務め、米国のモロ行政に資するためにミンダナオ島やスールー諸島各地を踏査し、タルシラ（王統年代記：アラビア語のシルシラーの転訛）やルワラン（マギンダナオの法典）など、王族や貴族が保管してきたジャウィ文字による現地語文書の複製を収集した。サリービーは、従来、門外不出とされてきたこれらの文書を英訳して公表し、マギンダナオ王国やスールー王国の起源や歴史を叙述した [Saleeby 1905; 1908]。史料を現地語によるオリジナルな形で収録していないという欠点はあるが、これらはフィリピンのイスラームに関する重要な基礎資料となっている。

サリービーは、フィリピン・ムスリムは未開な野蛮人ではなく、法や社会制度、アラビア文字や宗教学の知識など、イスラーム文明に基礎を置く高度の文化を持つ人々であるとし、教育を通じて、彼らを良き市民に育て上げるべきだと主張した。

だが、サリービーによって先鞭をつけられたフィリピン・ムスリムの歴史研究やイスラーム研究は、その後、米国植民地政府によって本格的に展開されることはなかった。1935年に発足したコモンウェルス政府（独立準備政府）は、将来の独立国家を支える経済的基盤としてミンダナオ島の土地や天然資源に注目し、入植事業を推進した。そのため、ミンダナオ島は「約束の地」として脚光を浴びたが、同島の開発の担い手としては、キリスト教徒の実業家や入植民が想定されており、その先住民である、ムスリムや山地民族は開発の担い手としてではなく、むしろ、その障害としてみなされていた。1920-30年代には、「モロ族」平定作戦に参加した米国軍人の回想録 [Hurley 1936] や民族誌 [Orosa 1923] などが出版されている。

第二次世界大戦期には、南部フィリピンが戦略上の観点から注目され、連合軍への住民の協力という視点から、米軍関係者によってフィリピン・ムスリムの動向に関する報告書が作成されている [Kuder 1943]。²⁾

第二次世界大戦後は、米国を中心として、フィリピン・ムスリムを構成する各言語集団に関する社会学や人類学の研究が進展した。シカゴ大学のフィリピン研究プログラムなどを拠点として、フィリピン研究が盛んに行われるようになり、南部フィリピンでの長期間のフィールドワークに基づく人類学の研究が行われた。Mednick [1965] や Kiefer [1969] はその代表的な例である。

一方、フィリピンでは、1950-60年代にかけて、米国統治期の文明化政策と共通の要素を持

2) 戦前、戦中の日本側の研究については、別途検討を要するが、さしあたり川島 [1996: 108-113] を参照のこと。

ち、近代化論からも影響も受けた調査報告や研究が発表された。ムスリム下院議員による「モロ問題」に関する報告書 [Alonto *et al.* 1955]³⁾ は、南部社会の近代化とそのための政府援助、ムスリムに対する差別撤廃を骨子とする政策を提言した。他にも、教育や社会経済事業を実施して、社会的動員を進め、それによってフィリピン・ムスリムを支配的文化へ融合していくという立場に基づく研究が発表された [Hunt 1954; Isidoro 1968]。

1960年代は、フィリピン・ムスリムの研究者が自らの社会や歴史について、本格的な研究を発表し始めた時代であった。この時期に登場したフィリピン・ムスリム研究者の代表例として、マラナオの社会学者、マミトゥア・サベール (Mamitua Saber) と、フィリピン北部の出身でアラブの血を引くセザール・マフル (Cesar Majul) を挙げることができる。サベールはカンザス大学、マフルはコーネル大学への留学経験がある。サベールはマラナオ社会を中心としたフィリピン・ムスリムの社会や文化についての研究を発表するとともに、1960年に設立された国立ミンダナオ大学でフィリピン・ムスリムに関する研究を進めた。サベールが所長を務めた同大学の大学研究センター (現マミトゥア・サベール記念研究センター) は、フィリピン・ムスリム研究の拠点の一つであり、ミンダナオ・ジャーナル (*Mindanao Journal*) を初めとする刊行物を発行している。マフルは、フィリピン革命思想の研究から出発して、南部フィリピンのイスラーム化や、南部に進出を試みるスペインに対するスールー王国やマギンダナオ王国の抵抗、「モロ戦争」の歴史を研究し、最初の本格的なフィリピン・ムスリム社会の通史 [Majul 1973] を著した。マフルは、1970年代に開設されたフィリピン大学イスラーム学研究所の所長に就任し、フィリピン・ムスリムの歴史研究の進展に貢献した。

1960年代末、フィリピン・ムスリムが南部の分離独立を要求し、南部各地で流血事件が頻発し、さらに70年代にはいって MNLF を中心とする武力闘争が展開されるようになった。この紛争の爆発は、フィリピン・ムスリムに対するこれまでの近代化論的アプローチの失敗を示すものであった。「ムスリムが武器を手にしてフィリピン政府に立ち向かうのはなぜか」「どうすればこの問題を解決できるか」という問題に全国的な関心が集まり、フィリピン・ムスリムの分離運動に関する評論や研究が発表された。これらについては、次節で別途検討する。

分離独立武装闘争に直面したマルコス政権は、ムスリムに対する宥和政策を実施した。フィリピン政府は、マフルらの提言を部分的に受け入れ、従来の同化主義に代わる新しい国民統合イデオロギーとして、文化多元主義を採用した。これは、フィリピン政府がムスリムの文化伝統や歴史を尊重し、それをフィリピンの国民伝統や国民史の一部として積極的に認め、それ

3) 南部フィリピンでは1950年代にムスリムの局地的反乱が発生し、治安、防衛上の問題を呈していた。この問題の原因究明、解決策の勧告を目的として、フィリピン議会下院にモロ問題調査委員会が設置された。

によってムスリムのフィリピン国家に対する帰属意識を醸成しようという考え方である。このような動きのなかで、フィリピン・ムスリムの社会や文化に関する関心が高まり、1970年代以降、これらに関する論文集が相次いで発行された。地方史・社会史の本格的な研究も行われるようになり、Warren [1981] や Laarhorven [1989] などが発表された。⁴⁾

マルコス政権は、フィリピン政府がムスリムの権利を尊重している姿勢を国内外にアピールするために、1977年、ムスリム身分法を制定したが、その準備作業として、これまで本格的に行われてこなかったフィリピン・ムスリムの法に関する調査研究が、マフルや、フィリピン・ムスリムの法律家、マイケル・マスツラ (Michael Mastura) によって着手された [Mastura 1984b]。

フィリピン・ムスリムの研究の進展に貢献した現地の研究機関として、先述のミンダナオ国立大学の他に、南ラナオ州マラウィ市にあるプロテスタント系の私立学校、ダンサラン学院のダンサラン研究センター (現ピーター・ガウイン記念研究センター) を挙げておく。同センターでは、アメリカ人のピーター・ガウイン (Peter Gowing) が中心となって、フィリピン・ムスリムに関する資料収集や研究を精力的に行い、季刊誌ダンサラン・クォーターリー (*Dansalan Quarterly*) を発行してきた。

以上、1980年代までのフィリピン・ムスリム研究の動向を概観したが、これらの研究の特徴として、以下の点を指摘できる。

第一は、アメリカ人が本格的な研究を開始し、それに続いて、米国に留学したり、フィリピン国内で英語による大学教育を受けたフィリピン人研究者が研究の主たる担い手であったために、英語による研究が圧倒的多数を占めている点を指摘できる。そのため、特に社会科学分野の研究には、米国における研究動向の影響を強く受けたものが多くみられる。

第二は、対象地域・言語集団と研究テーマの両面において、偏りがみられる点である。フィリピン・ムスリムは、言語を基準とすると、10以上の集団に分けることができるが、これまでの研究は、その中で人口規模の大きく、政治的に有力な三集団、マラナオ、マギンダナオ、タウスグに集中しており、それ以外の集団に関する研究の蓄積が少ない。研究テーマの面では、冒頭で指摘したとおり、民族誌や人類学、分離独立運動、地方史の分野に研究が偏っている。

第三に、1960年代後半以降、南部フィリピン出身の研究者の貢献が著しい点を指摘できる。先述のモロ問題調査委員会の提言を受けて、1957年に国民統合委員会が設立され、ムスリムや他の少数民族の青年に奨学金が支給されるようになり、マニラや他の都市の大学に進学する者が増加した。これらの学生が卒業論文や修士・博士論文のテーマとして出身地の社会、文化、

4) これらに先立ち、すでに1970年代に Ileto [1971] が発表された。

政治、歴史などをとりあげるようになり、フィリピンのアカデミズムのなかで、英語を用いて自分たち自身について学習や研究を行い、発言する能力を持つフィリピン・ムスリムの層が拡大した。

第四に、1973年に開設されたミンダナオ国立大学アジア・イスラーム学研究所（現ファイサル王アラビア語イスラーム学アジア学研究所）や、前述のフィリピン大学イスラーム学研究センターなどにおいて、フィリピン・ムスリムについて研究する東南アジアや南アジア、中東出身のムスリム留学生や研究者が少数ながらも出現するようになった点を挙げておきたい。

Ⅱ フィリピン・ムスリム分離独立運動研究

—— 社会経済的アプローチとイスラーム性重視アプローチ ——

ここでは、フィリピン・ムスリムの分離運動に関する研究を、大きく社会経済的アプローチとイスラーム性重視アプローチに分け、それぞれの立場の代表的な研究を取りあげて検討する。

フィリピンのマスメディアでは、ミンダナオ紛争をキリスト教徒とムスリムの宿命の宗教対立としてセンセーショナルに取りあげるものが多かった。これに対し、ミンダナオ紛争の展開を、歴史、政治、経済、社会などの側面から多面的に検討し、こうした通俗的な「宗教対立説」を否定する研究が発表されるようになった。『アジア・ウィーク』の編集者（当時）であった T. J. S. ジョージは、このような視点からミンダナオ紛争を叙述し、通俗的な宗教対立説の誤りを指摘した [George 1980]。ジョージは、1960年代末から70年代初頭にかけて南部で起きたいくつかの抗争や虐殺事件について、それぞれの背景や原因を分析し、それらが宗教対立という要因では説明できないことを示した。特に選挙において、キリスト教徒、ムスリム双方の政治家が宗教を集票の道具として利用し、さらにこの双方の私兵集団が用いられたことが流血事件の原因であることを明らかにした。結局、ムスリム、キリスト教徒双方の政治家が自らの野心や利益を満たすことに専念し、ムスリム民衆の利益がフィリピンの国家システムに反映されなかったことに問題がある。従って、これはフィリピン政治の問題であり、政治的に解決されねばならない。フィリピン・ムスリムは社会的公正を求めて戦っているのだから、それを実現することが紛争の解決につながるとジョージは主張し、ムスリムの権利をフィリピン国家の中で積極的に認知し、これらの権利を保障するために、自治、連邦制などの政治体制を採用することを提言している。さらにジョージは、フィリピン・ナショナリズムが抱える問題点も指摘している。フィリピン人は、スペインの君主、フェリペ2世に起源を持つ国名を政治的独立達成後も使用し続けているが、この事実が象徴的に示すように、キリスト教徒フィリピン人も、西洋の植民地主義から完全に解放されていない。そこで、キリスト教徒、ムスリムが協力して、

フィリピン・ナショナリズムに内在する植民地的要素を克服し、アジアの国として生きてゆくべきだと主張している。

1970年代後半以降、「宗教対立説」を否定するとともに、ミンダナオ紛争の源泉は基本的に経済問題であるとし、主として階級闘争の視点からこの紛争を説明する研究が発表されてきた。Stauffer [1982], Silva [1979], Molloy [1983], Mercado [1984] などがこれにあたる。これらの研究は、フィリピン・ムスリムの抵抗をフィリピン民衆の反帝国主義闘争の一部として位置づけ、ムスリム民衆と他のフィリピン民衆との連帯の必要性を主張した。Mercado [1984] によると、モロの戦いは、外国資本と国内エリートによる南部フィリピンの資源の搾取過程で周辺化された民衆の抵抗であり、フィリピン社会の政治経済構造の中で抑圧された、他のフィリピン人民衆の抵抗と共通の根を持つ。イスラームがモロの闘争において重要な役割を果たしたことは否定できないが、この紛争の源泉は基本的に経済問題であり、モロと他のフィリピン人が連帯して、大衆レベルで民主的革命運動を組織し、地主の搾取や外国の経済支配から自らを解放すべきであると主張している。MNLF に対しては、モロ大衆にとっては抵抗の最後のよりどころであったとして一定の評価を与えているが、外国の支援に頼りすぎ、モロ大衆への政治的動員の努力を怠ったという点、ならびに、イスラーム性を強調したために、他のフィリピン人の離反を招いた点を批判している。

これらの非宗教的アプローチに対し、1980年代に入って、ムスリムの研究者によって、ムスリムの視点から見ると、紛争の源泉はイスラームそのものであるという見解が発表されるようになった。このイスラーム性を重視するアプローチの例としては、前述のフィリピン・ムスリム歴史学者、マフルの研究 [Majul 1985]、ならびに、南部タイのパタニ出身のムスリム政治学者、W. K. チェマンによる南部フィリピンと南部タイのムスリムの分離運動の比較研究 [Che Man 1990] をとりあげる。

マフルは、現代のフィリピン・ムスリムの抵抗を、ウンマ（イスラーム共同体）の一体性の保持、すなわち、ムスリムがムスリムとして生きることのできる社会の維持を目的とした戦いであるとし、イスラーム運動として位置づけている。フィリピン・ムスリムは、中北部のキリスト教徒フィリピン人とは異なる歴史的経験を持ち、さらにイスラーム諸国との交流から刺激を受けて、イスラーム意識を高めた。その結果、彼らはイスラームを絆として、キリスト教徒フィリピン人とは別個のアイデンティティーを形成するようになった。フィリピン・ムスリムは、フィリピン政府を「彼ら（＝キリスト教徒フィリピン人）の政府」と認識し、自分たちの政府であるとは感じていなかった。これと並行して、キリスト教徒の南部への入植が進み、土地問題が深刻化し、また、官憲の絡んだ虐殺事件が頻発した。そこで、彼らは、キリスト教徒フィリピン人とその政府によって、フィリピンの全ムスリムに対する集団虐殺（ジェノサイド）が意図的に行われつつあると認識するに至った。この生存の危機に際してのムスリ

ムの抵抗が、この紛争の本質であるとマフルは主張する。

マフルは、フィリピン・ムスリムが求めているのはウンマの保持であるのだから、この紛争の解決のためには、何らかの形でフィリピンにおいてムスリムのウンマの存続を保障することが肝要であると主張し、文化的多元主義の採用を提案している。マフルの言う文化的多元主義とは、異なる文化集団のすべてが、それぞれの文化的アイデンティティーを維持しつつ国家権力を分かち合い、それらのすべてがより大きな共同体、すなわち、ネーションに対する共通の忠誠心により結ばれるという考え方である。このような理念に基づいて、フィリピン・ナショナリズムとムスリムとしてのアイデンティティーを共存させ、キリスト教徒フィリピン人との間に「別個にして対等」の関係を築くべきだと論じている。また、ジョージやメルカードがフィリピン・ムスリムの社会が言語集団や階層により分断されている面や、MNLF 指導部におけるリーダー間の個人的対立を強調しているのに対し、マフルはこのようなムスリム内部の亀裂の存在を十分認めるものの、フィリピン・ムスリムのウンマが危機に瀕したときには、フィリピンの全ムスリムがこれらの対立を越えて一致団結するという面を強調している。

ムスリムとしてのアイデンティティーとフィリピン・ナショナリズムとの共存を主張するマフルの思想は、彼の初期の研究テーマであるフィリピン革命思想研究にも見いだすことができる [Majul 1957; 1959; 1960]。マフルは、19 世紀末革命リーダーの思想を基本的にフランス革命、アメリカ合衆国独立の思想に連なる、欧米自由主義の思想として位置づけ、アポリナリオ・マビニやホセ・リサールの思想を高く評価している。そして、フィリピン人の共同体は、キリスト教という宗教の絆で結ばれるものではなく、非宗教的なモラル——平等、人権、自由、平和など——の原則を共有することによって形作られた共同体であるという考え方が既に当時存在したことを強調している。19 世紀末革命リーダーが掲げたこの理想は、米国植民地支配により挫折し、フィリピンは今日、この理想を実現する過程にある。そしてその過程の中で、ムスリムに対する偏見や差別の是正、平等の保障、ムスリムとしての諸権利の認知などの要求を実現していくことを示唆している。マフルの政治思想は、フィリピン・ナショナリズムの再解釈を根とし、フィリピン・ムスリムの置かれた状況の中で、彼らと国民国家との関係に何らかの折り合いをつけようとする試みの中で生まれたものといえる。

これに対し、Che Man [1990] は、南部フィリピンと南部タイ（パタニ）のムスリムの分離運動を比較検討し、それを通じて、南部フィリピンにおける「モロ」や南部タイにおける「マレー」というアイデンティティーが中央政府の統合の試みにもかかわらず、根強く生き残ったことを強調している。チェマンは、「モロ」、および、「マレー」をイスラームを絆として形成されたエスニック集団としてとらえ、原初性を重視するエスニシティ論の枠組みに基づいてこれらの分離独立運動を説明している。

エスニック集団は、外部からの脅威や圧力が存在するときには、内部の階級、派閥、地域な

どの亀裂を越えて団結し、根強く抵抗する。帝国の時代には、周辺のエスニック集団は自治を許容されていたが、国民国家の時代になると、国家権力を掌握した支配的なエスニック集団が領域内の住民全ての文化、社会、政治の諸側面の統御を試み、周辺エスニック集団を国家の発展にとっての障害とみなすようになる。これに対し、周辺エスニック集団は、中央による統御の試みを外部からの圧力とみなし、それに対抗するために団結して抵抗するとチェマンは論じている。

では、これらのエスニック集団が既存の政治システム内の改革ではなく、システムからの分離を求めるのはどのような場合であろうか。イスラームは宗教であると共に社会・政治的秩序でもあり、ムスリムはウンマの保持を求める。非ムスリムが多数派をしめる国家の領域内にムスリムが居住している場合には、少数派であるムスリムに文化的自治の権利を認め、彼らのウンマの保持を保障する必要がある。そして、ムスリムが既存の国家の枠組みの中ではこのような要求を実現することが不可能だと認識した場合、彼らの運動は分離独立を目指すようになる。ムスリムは、フィリピン政府の軍事行動はもちろんのこと、入植、社会経済開発、教育振興などの南部での諸事業を、イスラームに基づいた生活体系に対する挑戦、脅威として認識した。そして、いったん、こうした認識が広く行き渡ってしまうと、単にシステム内で社会・経済・政治的不平等を是正することでは問題が解決できなくなる。従って、ムスリムのウンマに対する理解に基づいて、実質的な文化的自治を与えない限り、分離運動は続くであろう。このように、抵抗運動の担い手たちの視点から見れば、紛争の本質は経済的次元の問題ではなく、宗教や文化の問題であるとチェマンは論じている。

以上、ミンダナオ紛争に関する経済的要因重視アプローチと宗教性重視アプローチによる研究を紹介したが、これらには以下の問題点がある。

まず、経済的要因重視アプローチに関して、これらにおいて基本的な分析概念として用いられている階級について、南部フィリピン社会における実証的な分析が不足している点を挙げることができる。これらの研究では、伝統的封建体制（ダトゥ体制）が基本的にそのまま現代に持ち越され、地主対小作人・労働者の関係になり、地主が外国資本や中北部資本家と手を結んで大衆を搾取したと論じられることが多い。しかし、南部の階級構造の歴史的変化や地域的偏差の問題や、具体的に搾取がどのような形で行われ、エリートがそれを論理や言葉で正当化しようとしたのかという問題は十分に解明されていない。

また、イスラーム性重視アプローチの研究では、イスラームを絆としたアイデンティティーの根強さが強調され、フィリピン・ムスリムが何百年にもわたって、一丸となって戦ってきたという歴史叙述がなされている点を指摘できる。これはイスラーム運動指導者からみた運動の自己イメージを示してはいるものの、現実のフィリピン・ムスリム内部の多様性を説明することはできない。特にチェマンの研究では、エスニシティーの動的な面には注意が払われておら

ず、「モロ」アイデンティティーを自明のものとして固定的にとらえ、それが中央の統合の試みに拘わらず何百年にもわたって生き残ったとしている。しかし、実際には、フィリピン・ムスリムは今世紀初頭、米国植民地政府によって「モロ州」という単一の行政機関の管轄下に置かれるまで、共通の政治共同体を構成したことはなく、複数のスルタン制イスラーム王国が並立していた。そうした中で人々の基本的なアイデンティティーの単位は、これらの王国よりももっと狭い、生活の範囲としての村や地域社会などであったと考えられる。また、今日においても、「モロ」というアイデンティティーが必ずしもフィリピン・ムスリム全体から広範な支持を得ているわけではない [Abbahil 1984]。マフルもチェマンも「ムスリムの視点」を強調するが、単数ではなく複数の「ムスリムの視点」が存在すると考え、それらについて実証的に検討する必要がある。

フィリピン・ムスリムの政治運動を理解するためには、非宗教的要因重視アプローチが指摘した政治・社会・経済的構造の問題と、イスラーム性重視アプローチが指摘した政治運動の担い手の主観的な意識の問題の双方を視野に入れ、両者を関連づける必要がある。すなわち、南部フィリピン社会やそれを取り巻く社会の構造を実証的に解明するとともに、フィリピン・ムスリムがそうした構造をどのように認識し、そこにイスラームがどのようにかかわっているかという点を明らかにしていく必要がある。

だが、実証的な研究が十分に行われてこなかったことには、それなりの理由がある。MNLFは武力闘争を行っており、そうした状況の中で、研究者が長期間のフィールドワークを行うことが困難であった。⁵⁾ マルコス政権は MNLF のメンバーを処罰することができたので、現地で MNLF に関する情報を収集したり、住民の態度を調査することは、研究者本人にとどまらず、調査地の住民を危険な状況に追い込むことになったからである。こうした事情のため、フィリピン・ムスリムの分離独立運動の研究は長らく停滞していたが、最近、このような停滞状況を打開する研究が刊行された。それは、人類学者トーマス・マッキーナによるコタバト州における分離独立運動の研究 [McKenna 1998] である。

この研究は、知識人や政治エリートではないごく普通の男女が、なぜ、自分や他人の血を流すことをいとわず、民族主義の武装闘争に身を投じるのか、という問題意識から発している。マッキーナは、これまでの分離独立運動に関する研究が、運動のリーダーがいかにして、どのような民族主義イデオロギーを作り出したかという点に関するものに偏っていることを指摘する。これらの研究では、末端の参加者は、リーダーによって作り出された公式の民族主義イデオロギーによって運動に動員される受動的な存在として描かれている。これに対し、マッキー

5) マルコス戒厳令体制期に行われた数少ない長期間のフィールドワークに基づく研究としては、Bentley [1982] が挙げられる。

ナは、公式の民族主義の言説を検討するだけでは不十分であり、末端で分離独立運動を支えた平戦闘員や一般の支持者住民の視点を明らかにする必要があるとした。彼は、1980年代半ば、クタバト市内の都市貧困層ムスリム居住区でフィールドワークを行い、参与観察やインタビューによって得たデータに基づいて、運動のリーダーに対する住民の態度や行動を検討した。その結果、モロ民族主義イデオロギーの中核的観念であり、運動の主要なシンボルである「バンサ・モロ（モロ民族）」という観念が、実際には、末端の戦闘員や一般の支持者住民に根付いていなかったと主張する。彼らは、運動リーダーの訴えかけに盲従したのではなく、むしろ、それらに対して懐疑的でさえあった。そして、自分たちの経験に基づいてそれらを評価し、経済的必要性や政治的現実を見極めながら、それらのバランスをとるような対応を慎重に選択したのである。また、マッキーナは、1980年代に入って分離独立運動が、合法的政治活動や宗教運動など、武力を伴わない合法的活動に力点を移すようになり、中東でイスラーム教育を受けた新興イスラーム指導者が、活発に倫理的、政治的プログラムを推進し、伝統的なダトゥ支配を批判するようになったことを指摘し、それに対する一般住民の対応を論じている。ここでも一般住民は、新興イスラーム指導者が指導するイスラーム改革運動を醒めた目で見えており、目立たない形で抵抗した。マッキーナの研究は、このように、リーダーではない一般のムスリム住民を、想像力豊かで動的な対応をする存在としてとらえている。

マッキーナの研究は、分離独立運動の盛衰の鍵を握る一般ムスリム住民を分析対象として取りあげ、彼らが、分離独立運動やイスラーム改革運動のリーダーに対しても、また、フィリピン国家に協力的なムスリム政治リーダーに対しても懐疑的で、自らの経験に基づいて慎重に態度を決定する姿を描き出した。この研究が長期間のフィールドワークに基づく、最初の本格的なフィリピン・ムスリム分離運動の研究であるのみならず、「日常的政治」⁶⁾という観点から分離独立運動の起源や意義を説明しようとした最初の研究として、フィリピン・ムスリム政治運動研究史において大きな意義を持つ。フィリピン政治研究や、分離独立運動や民族主義運動研究一般にも、多くの示唆を与えるものといえよう。都市貧困層居住区とは異なる農村部や、クタバト以外の地域でも、同様の状況が見いだされるのか否か、今後の研究によって明らかにしていく必要がある。

Ⅲ 「マイノリティ」研究をこえて

フィリピン・ムスリムの研究はフィリピンの「マイノリティ」研究という枠組みの中で行わ

6) Scott [1985; 1990], Kerkvliet [1990] で用いられた概念。

れたものが多い。しかし、フィリピン・ムスリムは、東南アジア島嶼部においては、決してマイノリティではない。南部フィリピンの住民は、インドネシア群島やマレー半島の人々と交易などを通じて活発に交流を行ってきた歴史を持っており、これらの地域は、マレー系の文化や慣習とイスラームの伝統や文化を融合させた文化を形成してきたという共通点を持つ。それにもかかわらず、東南アジア島嶼部マレー世界の一部という視点から、これらの地域のムスリム研究、イスラーム研究の蓄積を踏まえて行われた研究は少ない。従って、視野をフィリピンに限定せず、東南アジアのイスラーム世界という、より広い視野を持つことが必要である。さらに、南アジアから中東、北アフリカまでの広がりをもつ国際的なイスラーム社会の一部という視点で、フィリピン・ムスリムをとらえることも必要である。

東南アジアのイスラーム研究や、世界的なイスラーム研究の水準からみて、フィリピンのイスラーム研究が大きく後れをとっている分野として、まず、イスラーム教育の研究があげられる。1970年代以降、イスラーム国や国外イスラーム団体の援助を受けて多数のマドラサ（洋式イスラーム学校）が建設されたが、マドラサ設立にあたっては、フィリピン政府への届け出や許可など、法的手続きが不要であり、国家による管理統制や監視が行われておらず、マドラサ側での組織化、制度化も行われていなかったため、その実態さえ、明らかではなかった。フィリピン政府は、マドラサが分離独立運動の温床になっているとみて警戒感を持ち、管理統制の方法を模索した。教育関係者や非分離派のイスラーム知識人は、マドラサ教育はイスラーム意識を強化し、ムスリム学生の「異化」を促進する一方、フィリピン社会で経済生活を営むのに必要な知識や技術を欠く人々を送り出してきたとして、改革の必要性を主張した。こうして、1980年代以降、フィリピン政府の支援によってマドラサ教育を改革し、それをフィリピンの教育制度に組み込んでいく方向でマドラサ教育の改革が議論されるようになり、その過程でマドラサ教育に関する研究が開始された。Mastura [1984b], Tamano [1991] はフィリピンにおけるマドラサの歴史を概説したものであり、Boransing *et al.* [1987] は、その現状と将来のあり方を論じた研究であり、今後のマドラサ研究の出発点として重要である。一方、マドラサ以前のイスラーム教育については、スペイン人やアメリカ人の残した断片的な記述や、個別の民族誌に基づいて、宗教的知識のある人物がコーラン塾を開いたり、個人的にコーランの詠みかたを教えたと一括して論じられており、教師のネットワークや教材、思想などについて実証的に検討した研究は欠如している。

これと関連して、イスラーム思想や宗教指導者、神秘主義に関する研究が欠落している点を指摘することができる。これらの分野の研究が発達しなかった理由の一つとして、米国統治期にアメリカ人がこれらに関する体系的、本格的な調査を行っておらず、植民地期の史料や研究の蓄積がないという点が挙げられる。米国人行政官が書いた報告書の中には、宗教指導者やコーラン塾についての断片的な記述や、ムスリム反乱における宗教指導者の役割の重要性を指

摘したものは散見されるが、これらは表面的な観察に基づいた記述であり、思想にまで踏み込んだものではない。インドネシアにおけるオランダのムスリム統治と異なり、イスラーム学や他のムスリム社会に対する知識を持つ専門家を投入して徹底的に情報を収集することはなかった。現地の米国人行政官は、宗教リーダーやコーラン塾に対して警戒感を持っていたものの、米国植民地政府にとって、ムスリム問題は局地的な問題にすぎず、イスラームに対してそれほど強い脅威感を抱いていなかったと考えられる。米国植民地政府は、むしろ、宗教リーダーやコーラン塾を文明化政策にとっての障害とみなしており、宗教への不干渉を基本方針として、それらが自然死を迎えるまで、大目に見ていたと思われる。この分野の研究が進展しなかったもう一つの理由としては、宗教指導者は地方言語で著述や議論を行う⁷⁾ので、英語を媒体とするフィリピンのアカデミズムの中で等閑視されてきた点を指摘できる。イスラーム教育、イスラーム思想、イスラーム指導者などの分野について、現地語史料の発掘や、従来の史料の再検討を行って研究の基礎を固める必要がある。

最後に、フィリピン・ムスリム研究に積極的に取り組んでいる研究機関として、フィリピン大学総合開発研究センター（UP-CIDS）のミンダナオ研究プログラムを紹介する。同プログラムは、今日、開発により大きく変容しつつある南部フィリピンの政治、経済、社会、文化の諸問題について様々なディシプリンを動員して総合的に研究することを目的として、1994年に開始された。同プログラムは、フィリピン・ムスリムの武装闘争についての研究を著した歴史家、サムエル・タンに率いられ、南部フィリピンに関する研究を精力的に行い、その成果として多数の出版物を刊行してきた。これらには、Tan and Wadi [1995], Tan [1995], Bakuludan *et al.* [1996] などが含まれる。また、同プログラムでは、ジャウィ文字で書かれた一次史料の発掘、収集を進め、その成果を刊行している [Tan 1996]。この作業は現在も継続中であり、これらは近い将来、フィリピン・ムスリム歴史研究を大きく進展させると期待される。

また、ムスリム女性を対象とした研究はこれまで大変少なかったが、最近、この分野でも先駆的な研究が発表されている。本稿では日本での研究動向について論じることができなかったが、近年、長期間のフィールドワークに基づく本格的研究を行う日本人研究者が出てきている。⁸⁾

今後のフィリピン・ムスリム研究は、フィリピンの「マイノリティ」としての研究に加えて、現地語やジャウィ文字史料の発掘と収集、それらに基づいた歴史研究の充実、さらに近隣イスラーム地域やより広いイスラーム世界での研究動向も視野に入れた研究へと発展することが期待される。

7) 近年は、中東に留学し、アラビア語で著述や議論を行うことのできるウラマーがいる。

8) 床呂 [1992], 森 [1996], 長津 [1997], Aoyama [1998], 赤嶺 [1999], 石井 [1999] など。

参 考 文 献

- Abbahil, Abdulsiddik A. 1984. The Bangsa Moro: Their Self Image and Intergroup Ethnic Attitudes. *Dansalan Quarterly* 5(4): 197-250.
- 赤嶺 淳. 1999. 「南沙諸島海域におけるサマの漁業活動——干し魚と干しナマコの加工・流通をめぐって」『地域研究論集』2(2).
- Alonto, Domocao; Amilbangsa, Ombra; and Mangelen, Luminog. 1955. Report of the Special Committee to Investigate the Moro Problem, Especially with Regard to Peace and Order in Mindanao and Sulu. House of Representatives, Third Congress of the Republic of the Philippines.
- Aoyama, Waka. 1998. *A Sequel to Badjaw: A Socio-Economic Study on Badjao Migrants in Davao City*. Setsutaro Kobayashi Memorial Fund, Kobayashi Fellowship Program, A Research Paper for 1997. Fuji Xerox Co., Ltd.
- Bakuludan, Samier M.; Hairulla, Munap H.; and Mariano, Ermina K. 1996. *Annotated Bibliography: Maguindanaoan Tausug Yakan Studies*. Mindanao Studies Program. Quezon City: University of the Philippines Center for Integrative and Development Studies.
- Barra, Aminoddin Hamid. 1993. The Sharia Law in the Philippines: An Introduction. *Dansalan Quarterly* 13 (1-4): 2-107.
- Bentley, Carter. 1982. Law, Disputing, and Ethnicity in Lanao, Philippines. Ph. D. dissertation, University of Washington.
- Boransing, Manaros; Magdalena, Federico V.; and Lacar, Luis Q. 1987. *The Madrasah Institution in the Philippines: Historical and Cultural Perspectives, with a Directory*. Published under a grant by the Toyota Foundation. Iligan City.
- Che Man, W. K. 1990. *Muslim Separatism: The Moros of Southern Philippines and the Malays of Southern Thailand*. Singapore: Oxford University Press.
- Ferrer, Miriam Coronel. 1997. *The Southern Philippines Council for Peace and Development: A Response to the Controversy*. Quezon City: University of the Philippines Center for Integrative and Development Studies.
- George, T. J. S. 1980. *Revolt of Mindanao: The Rise of Islam in Philippine Politics*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Gowing, Peter G. 1964. *Mosque and Moro: A Study of Muslims in the Philippines*. Manila: Philippine Federation of Christian Churches.
- _____. 1977. *Mandate in Moroland: The American Government of Muslim Filipinos 1899-1920*. Quezon City: University of the Philippines.
- _____. 1979. *Muslim Filipinos: Heritage and Horizon*. Quezon City: New Day Publishers.
- 早瀬晋三. 1986. 「ミンダナオ研究——資料解説」『史苑』45(2): 57-74.
- Horvatic, Patricia. 1993. *Islam and Muslims in Southeast Asia: A Bibliography of English-Language Publications, 1945-1993*. Southeast Asia Papers No. 38. Center for Southeast Asian Studies, University of Hawaii at Manoa.
- _____. 1994. Ways of Knowing Islam. *American Ethnologist* 21(4): 807-820.
- _____. 1997. The Ahmadiyya Movement in Simunul: Islamic Reform in One Remote and Unlikely Place. In *Politics and Religious Renewal in Muslim Southeast Asia*, edited by Robert W. Hefner and Patricia Horvatic. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Hunt, Chester. 1954. *Cotabato: Melting Pot of the Philippines*. Manila: UNESCO National Commission of the Philippines.
- Hurley, Vic. 1936. *Swish of the Kris: The Story of the Moros*. New York: E. P. Dutton & Co., Inc. (Reprinted in 1985, Manila: Cacho Hermanos Inc.)
- Ileto, Reynaldo C. 1971. *Maguindanao, 1860-1888: The Career of Datu Uto of Buayan*. Data Paper No. 82. New York: Cornell University.
- 石井正子. 1999. 「紛争とムスリム女性——MNLFと政府軍の武力対立に関する一考察」『地域研究論集』2(1).

- Isidoro, Antonio. 1968. *The Moro Problem: An Approach through Education*. (Reprinted in 1979, Marawi City: University Research Center, Mindanao State University)
- 川島 緑. 1993. 「戦後フィリピンにおけるイスラーム団体の発展——モロ国民主義に先行する政治的潮流」『アジア研究』39(4).
- . 1996. 「『モロ族』統治とムスリム社会の亀裂——ラナオ州を中心に」『日本占領下のフィリピン』池端雪浦(編). 岩波書店.
- Kerkvliet, Benedict J. 1990. *Everyday Politics in the Philippines: Class and Status Relations in a Central Luzon Village*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Kiefer, Thomas. 1969. *Tausug Armed Conflict: The Social Organization of Military Activity in a Philippine Moslem Society*. Research Series No. 7. Chicago: Philippine Studies Program, University of Chicago.
- . 1972. *The Tausug: Law and Violence in a Philippine Moslem Society*. New York: Holt, Reinhart and Winston.
- Kuder, Edward M. 1943. Statement of M. Kuder to Dr. Joseph R. Hayden Regarding Events and Conditions in Lanao Immediately preceding the War and from December 8, 1941 to September 29, 1943 with Appendices on Problems of Government in the Predominantly Moslem Provinces and Other Subjects. Hayden Papers. Bentley Historical Library, the University of Michigan.
- Laarhoven, Ruurdje. 1989. *Triumph of Moro Diplomacy: The Maguindanao Sultanate in the 17th Century*. Quezon City: New Day Publishers.
- Majul, Cesar Adib. 1957. The Political and Constitutional Ideas of the Philippine Revolution. *Philippine Social Sciences and Humanity Review* 22 (1, 2): 1-211.
- . 1959. *A Critique of Rizal's Concept of a Filipino Nation*. Diliman: s. n.
- . 1960. *Mabini and the Philippine Revolution*. Quezon City: University of the Philippines Press.
- . 1973. *Muslims in the Philippines*. Quezon City: University of the Philippines.
- . 1985. *The Contemporary Muslim Movement in the Philippines*. Berkeley: Mizan Press.
- Mastura, Michael. 1984a. Assessing the Madrasah as an Educational Institution: Implications for the Ummah. In *Muslim Filipino Experience: A Collection of Essays*, Philippine Islam Series, No. 3, edited by Michael Mastura, pp. 93-108. Manila: Ministry of Muslim Affairs.
- . 1984b. The Introduction of Muslim Law into the Philippines Legal System. In *Muslim Filipino Experience: A Collection of Essays*, Philippine Islam Series, No. 3, edited by Michael Mastura, pp. 199-212. Manila: Ministry of Muslim Affairs.
- . 1994. Muslim Scholars and Social Science Research: Some Notes on Muslim Studies in the Philippines. In *Muslim Social Science in ASEAN*, edited by Omar Farouk Bajunid. Kuala Lumpur: Yayasan Penataran Ilmu.
- McKenna, Thomas M. 1998. *Muslim Rulers and Rebels: Everyday Politics and Armed Separatism in the Southern Philippines*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Mednick, Melvin. 1965. *Encampment of the Lake: The Social Organization of a Moslem-Philippine (Moro) People*. Research Series No. 5, Philippine Studies Program, Dept. of Anthropology, University of Chicago.
- Mercado, Eliseo R. 1984. Culture, Economics and Revolt in Mindanao: Origins of the MNLF and the Politics of Moro Separatism. In *Armed Separatism in South-east Asia*, edited by Lim Joo-Jock and Vani S. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Molloy, Ivan. 1983. *The Conflicts in Mindanao: Whilst the Revolution Rolls on, the Jihad Falters*. Working Paper No. 30. Monash University.
- 森 正美. 1996. 「フィリピン・マラナオ社会における慣習・国家・イスラーム——法制度と紛争処理を通して」『国家のなかの民族——東南アジアのエスニシティ』綾部恒雄(編), 171-216 ページ所収. 東京: 明石書店.
- 長津一史. 1997. 「海の民サマ人の生活と空間認識——サンゴ礁空間 *t'bba* の位置づけを中心にして」『東南アジア研究』35(2).
- Noble, Lela Gardner. 1976. The Moro National Liberation Front in the Philippines. *Pacific Affairs*

- 49 (3): 405-424.
- _____. 1983. Roots of Bangsa Moro Revolution. *Solidarity* 4 (97): 41-50.
- _____. 1986. The Philippines: Autonomy for the Muslims. In *Islam in Asia: Religion, Politics, & Society*, edited by John L. Esposito, pp. 97-124. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Orosa, Sixto Y. 1923. *The Sulu Archipelago and Its People*. Younkers-on-Hubson, New York: World Book Company.
- Saleeby, Najeeb M. 1905. *Studies in Moro History, Law and Religion*. Manila: Bureau of Printing. (Reprinted in 1976, Filipiniana Book Guild)
- _____. 1908. *The History of Sulu*. Manila: Bureau of Printing. (Reprinted in 1963, Filipiniana Book Guild)
- _____. 1913. *The Moro Problem: An Academic Discussion of History and Solution of the Problem of the Government of the Moros of the Philippine Islands*. Manila: Press of E. C. McCullough & Co.
- Scott, James C. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.
- _____. 1990. *Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts*. New Haven: Yale University Press.
- Silva, Rad D. 1979. *Two Hills on the Same Land: Truth behind the Mindanao Problem*. Mindanao-Sulu Critical Studies & Research Group.
- Stauffer, Robert B. 1982. The "Development" of Mindanao. In *Two Views of the Muslim Problem in the Southern Philippines*, written by Peter G. Gowing and Robert Stauffer. Marawi City: University Research Center, Mindanao State University.
- Tamano, Salipada S. 1991. Historical Background of Madaris in the Philippines. *Dansalan Quarterly* 11 (1-4): 60-75.
- Tan, Samuel K. 1977. *The Filipino Muslim Armed Struggle, 1900-1972*. Manila: Filipinas Foundation.
- _____. 1989. *Decolonization and Filipino Muslim Identity*. Quezon City: Department of History, University of the Philippines.
- _____. 1995. *The Socioeconomic Dimension of Moro Secessionism*. Mindano Studies Reports 1995/ No.1. Quezon City: University of the Philippines Center for Integrative and Development Studies.
- _____. 1996. *Annotated Bibliography of Jawi Materials of the Muslim South*. Mindanao Studies Reports. Quezon City: University of the Philippines Center for Integrative and Development Studies.
- Tan, Samuel K.; and Wadi, Julkipli. 1995. *Islam in the Philippines*. Mindanao Studies Reports 1995/ No.3. Quezon City: University of the Philippines Center for Integrative and Development Studies.
- 床呂郁也. 1992. 「海のエスノヒストリー——スールー諸島における歴史とエスニシティー」『民俗学研究』57 (1).
- Turner, Mark; May, R. J.; and Turner, Lulu Respass, eds. 1992. *Mindanao: Land of Unfulfilled Promise*. Quezon City: New Day Publishers.
- Warren, James Francis. 1981. *The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press.